



「稲むらの火」題材に防災教える

授業で新聞を活用する教育方法について理解を深める第29回NIE土曜サロンが5月28日、読売新聞東京本社(東京・銀座)で開かれ、5都県から小中高の教諭らが集まり、活発に意見交換した。

発生から3か月近く経ってもなお連日大きく報道される東日本大震災。この日も震災をテーマにどのような授業ができるか、様々な提案が出された。

さいたま市立沼影小学校の萩原信一教諭が紹介したのが、防災訓話「稲むらの火」。1854年に起きた南海大地震で大津波が紀州(現和歌山県)を襲った際、稲むらに火を放って津波から村人を救い、復興対策にも尽力した偉人の実話に基づいて作られた。戦前から戦後にかけて、教科書に掲載された。

それを取り上げたのが5月8日付の読売新聞日曜版の記事や光村図書の小学校教科書。それらのコピーをみながら、「これは震災について子どもと話しやすい材料だ」などと意見が交わされた。

このほか紹介されたのが、津波にのまれて亡くなった母への思いを明かした小6の少女の記事。母は卒業式に子どもに手渡

される手紙を残しており、少女は母の「最後の手紙」を先生から受け取った。

「自分だけ生き残って申し訳ない」と思いながら避難所の炊き出し係などを務める高2の少年の記事に注目した教諭もいた。

鹿野川喜代美・読売新聞NIE企画デザイナーは、5月23日付の人生案内「祖母置き逃げた自分呪う」を取り上げた。女子大学生が祖母を置き去りにして津波から逃げたことで自分を責めているという相談内容。「被災者の気持ちに少しでも寄り添えたら」と話した。

記者と語るコーナーでは、教育ルネサンス取材班の矢子奈穂記者が、4月末から5月初めに連載した「養護教諭」について取材のこぼれ話を披露。宮城県東松島市の取材から、被災地の子どもや養護教諭の現状にも触れた。

NIE土曜サロンは2008年1月以来、原則的に「毎月第4土曜日の午後2時～4時」に開催。事前にNIE事務局へ申し込みを。

(住吉由佳)

